

二〇一九年度 郡山女子大学短期大学部 一般生Ⅱ期 入学者選抜	
氏名	国語
志願番号	

解答は、すべて解答用紙に記入すること。

問題Ⅰ

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

飛行機は、機械には相違ないが、しかしまたなんと微妙な分析の道具だろう！この道具がぼくらに (A) 大地の真の相貌を  
発見させてくれる。(B) 道路というものが、そういえば、幾世紀のあいだ、ぼくらを欺いていたのだ。ぼくらもじつは、  
人民たちが自分の政治に満足しているかどうかを知るため、彼らを一度訪問しようと思望したという (C) あの昔話の王様のよ  
うなものだったのだ。廷臣たちは、王様を①欺いて、そのお通りすじの両側に、楽しそうな背景を作りあげ、人を雇って、その  
前で踊らせておいた。細いひと筋の道以外、王は自分の国の何ものにも気がつかず、田舎の奥で飢死にしてゆきつつある民草  
が、自分を怨嗟していることにはまるで気づかずじまつた。

これと似て、ぼくらも長いあいだ、曲りくねった道路に沿って歩きつづけていた。道路は不毛の土地や、石の多いやせ地や、  
砂漠を避けて通るものなのだ。道路というものは、人間の欲望のままに泉から泉へと行くものなのだ。道路というものは、農  
夫たちを彼らの穀倉から麦畑へ導き、家畜小屋の戸口で、まだ眠っている畜類を受け取り、これを夜明けの光の中のクローバ  
ーの原にぶちまけるものなのだ。道路というものは、この村とあの村を連絡するものなのだ、なぜかというに、その二つの村  
のあいだで、人が結婚するからだ。(D) よしまた道路の一つが砂漠を横断するような冒険をすることがある場合にも、そ  
れはオアシスに出会うために、何度となく②迂回する。

こうして道路の曲折の一つ一つに、親切な偽りのように欺かれて、ぼくらの旅の途すがら、灌漑のゆきとどいた多くの土地  
と、多くの③カジユエンと、多くの牧原を見歩くことよって、ぼくらは長いあいだ自分たちの牢獄の姿を美化してきた。この  
地球を、ぼくらは、温潤なやさしいものだとはばかり思いこんできた。

ところが、ぼくらの視力は磨きすまされ、ぼくらは無残な進歩をとげた。飛行機のおかげで、ぼくらは直線を知った。離陸  
すると同時に、ぼくらは、水飼場から家畜小屋へと行きたがったり、町から町へと練り歩きたがったりする道路を捨てる。昔  
なつかしい奴隷の身分をかなぐり捨て、泉を追いかける必要から解放され、ぼくらは遠い自分たちの目標に、ぴたりと機首を  
向ける。するとはじめ、ぼくらの直線的な弾道のはるかな高さからぼくらは発見する、地表の大部分が、岩石の、砂原の、  
塩の④シユウセキであって、そこにときおり生命が、廢墟の中に生え残るわずかな苔の程度に、ぼつりぼつりと、花を咲かせて  
いるにすぎない事実を。

はたして、ぼくらは、谷間の奥に栄えるその文化が、ときに奇蹟的に気候に助けられて花園のように美しく咲き匂っている  
のを調査するにあたって、物理学者に、生物学者に、生物学者に変わってきている。はたしてぼくらは、人間そのものを⑤ヒハンするにあた  
っても、宇宙的な尺度をもって、科学者が拡大鏡をとおして見るように、機上の窓越しに、見るように変わってきた。はたして  
ぼくらは、いまにして (E) 人間の歴史を読みなおしているわけだ。

(サンテグジュペリ「人間の土地」堀口大學訳 新潮文庫 一九五五年)

民草Ⅱ民衆 怨嗟Ⅱうらみなげくこと

【一】傍線部①～⑤の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。(各二点)

【二】二重傍線部(A)について、作者はどのようなものだと述べているか。本文の語句を用いて答えなさい。(五点)

【三】二重傍線部(B)について、作者はなぜこのように考えたのか。本文の語句を用いて答えなさい。(五点)

【四】二重傍線部(C)について、「ぼくら」と「昔話の王様」はどこがどのように似ていたのか。本文の語句を用いて答えな  
さい。(五点)

【五】二重傍線部(D)と同様の意味の語句を次の中から選びなさい。(三点)

ア しかし イ もしも ウ たとえ エ だから オ とは言え

【六】二重傍線部(E)について、作者は具体的にどのようなことをしているか。本文の語句を用いて答えなさい。(五点)

【七】飛行機の操縦士であったこの作者が著した児童文学作品を次の中から選びなさい。(三点)

ア 二年間の休暇 イ アラビアンナイト ウ 不思議の国のアリス エ ガリバー旅行記 オ 星の王子さま

## 問題Ⅱ

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

寄合つて雑談をたのしんでいるようなとき、何かというときに、「〇〇では」と、自分の生地をあげて話題をそこに結びつけようとする人がいます。郷里を自慢する時、活気づく知人がいます。生地に対して①「レイトン」な友人もいます。

(A) 生地のこととなると、吐きすてるように言ったり、もつべき愛着のよすがもないというふうに話す人にも、それなりに理由はあると思うのですけれど、②「殊更」ほめたり、けなしたりというのではなく、(B)「自分と郷里との、よき、あしきつながら」を、公平な目で話す人に逢うとほっとします。

気がついた時にはもう、どこかの土地で育てられている。そこが好きだ嫌いだと言つても、生まれつくこと自体、すでにそういう関係であれば、とやかく言つてもはじまらない一面はあるでしょう。しかし、小さい時には意識していなくても、幼少期の生活環境としての風土や人々の生活が、人それぞれの人間形成に、直接間接に与える影響の深さを思うようになってみますと、殊更の讚美や自慢同様、むなしく感じられる時が少なくありません。

私は瀬戸内沿岸の出身です。二十歳で生地を離れました。ずっと後年になって、辿ろうとしなくても浮上がつてくる幼少期の記憶といえは、環境の事実としての自然と、まわりの人々に触発された心の動揺に関するもので、(C)「それを集めてみますと、自分の③「カンジュセイ」はさし当たっては親から与えられ、以後、親や書物に劣らず、郷里に育てられたかとさえ思われるほどです。

そうであるからといって、私は生地を自慢する気もありませんし、自慢できる理由もありません。こんなこともありません。今の都市生活からは縁遠くなりましたが、向こうではずっと衣桁(注1)を使っていました。壁際とか襖のそばに置いて衣類をかけておく衣架(注2)のことです。両開きのものをよく用いていました。

ところがこの「いこう」を、まわりの大人たちはみんな「ゆこう」と言っていたのです。子供は、どういう字を当てるのかも知らず、「ゆこう」と思い込み、ある日遠来の客人に、なぜ「いこう」と呼ばないのかと聞かれ、疑ってみたこともない言葉が、広くは通用しないのを知られました。

又、「大晦日」をさす「大つこもり」が、向こうでは何と、「大つももり」でした。うどんなほどにはそばをいたただかない土地で、それでも大晦日には年越しそばをいたただく、それが「つももりそば」。それで当たり前と思っていた「大つこもり」でした。

土地の古くからの言葉遣いに、④「頑なに固執している」と、(D)「日常の社会生活に不自由が生じます。特殊への理解を求めるには、方言はあまりにも多様であり複雑に過ぎます。社会生活を⑤「エンカツ」に営むためにはどうしても共通語が必要になります。ただ方言には、それが生まれる必然性がある、土地と人間との結びつきを証していますから、由来や運用の(E)「客観的な分析や(F)「帰納は、限られた土地に生きる(C)「人間の研究としてなおざりにできません。大変面白いです。

(H)「共通語に通じながらそれぞれの方言を守っていく上で大切なのは、固執の情熱ではなく、客観の目の導入ではないかと思うのですが。

(竹西 寛子著 『国語の時間』 読売新聞社 一九九四年)

注1 衣桁 室内で衣類などを掛けておく道具。木を鳥居のような形に組んで、台の上に立てたもの。衝立(ついたて)式のもの。二枚に折れる屏風(びょうぶ)式のものがある。

注2 衣架 衣類をかけておく家具。

【一】傍線部①～⑤のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。(各二点)

【二】二重傍線部(A)について、一般的に筆者は「生地」とはどのようなものであると言っているか、本文中の言葉を用いて説明しなさい。(四点)

【三】二重傍線部(B)について、筆者はなぜ「公平な目で話す人に逢うとほっとする」のか、説明しなさい。(四点)

【四】二重傍線部(C)「それ」とは、具体的に何を指すか、本文中より六字で抜き出して答えなさい。(三点)

【五】二重傍線部(D)について、方言が日常の社会生活に不自由を生じさせた本文中の言葉を二つあげなさい。また、それがどのようなことで不都合であったのか、簡潔に説明しなさい。(各三点)

【六】二重傍線部(E)の「客観的」という語句を、本文と同様の意味で使用した短文を作成しなさい。(四点)

【七】二重傍線部(F)「帰納」の対義語を次の中から一つ選び記号で答えなさい。(三点)

ア 演繹    イ 結論    ウ 推論    エ 法則    オ 論理

【八】二重傍線部(G)について、「方言」がなぜ人間の研究としてなおざりにできないのか、答えなさい。(四点)

【九】二重傍線部(H)にかかわって、方言についてのあなたの考えを二〇〇字程度でまとめなさい。(二十点)

解答用紙

氏名		二〇一九年度 郡山女子大学短期大学部一般生Ⅱ期入学者選抜 <b>国 語</b>
志願番号		
得点		

問題Ⅰ

【七】									
									①
									②
									③
									④
									⑤
3点	5点	3点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	10点

問題Ⅱ

【八】	【七】	【六】	【五】		【四】	【三】	【二】	
			②言葉	①言葉			①	
			②説明	①説明			②	
							③	
							④	
							⑤	
4点	3点	4点	12点		3点	4点	4点	10点



氏名

国語

志願番号

得点

問題Ⅰ

【一】	①	あざむ	②	うかい	③	果樹園	④	集積	⑤	批判
【二】	地表の大部分が、岩石の、砂原の、塩の集積であつて、そこにときおり生命が、廃墟の中に生え残るわずかな苔の程度に、ぼつりぼつりと、花を咲かせているにすぎない。									
【三】	道路は不毛の土地や、石の多いやせ地や、砂漠を避けて通るもので、砂漠を横断するような冒険をするところがある場合にも、それはオアシスに出会うために、何度となく迂回する。このため、ぼくらは長いあいだ自分たちの牢獄の姿を美化し、この地球を湿潤なやさしいものだとばかり思いこんできたから。									
【四】	昔話の王様は、人民たちが自分の政治に満足しているかどうかを知るために出かけたが、廷臣たちは、そのお通りすじの両側に、楽しそうな背景を作りあげたり、人を踊らせておいたため、王は自分の国の何ものにも気づかなかつた。ぼくらは不毛の土地や、石の多いやせ地や、砂漠を避けて通る道を歩いてきたために、この地球を湿潤なやさしいものだとばかり思いこんできたから。									
【五】	ウ									
【六】	飛行機に乗り空から地表を眺めることで、まるで物理学者や生物学者のように谷間の奥に栄える文化を調査したり、科学者のように宇宙的な尺度をもつて人間を観察したりして、これまで道に縛られてきた人間の歴史を空から読み直している。									
【七】	オ									

問題Ⅱ

【一】	①	冷淡	②	ことさら	③	感受性	④	かたく	⑤	円滑
【二】	(幼少期の生活環境としての風土や人々の生活が、)人それぞれの人間形成に、直接間接に与える影響の深いもの。									
【三】	自分の郷里が好きだ嫌いだと言っても、生まれつくこと自体、すでにそういう関係であれば、とやかく言ってもはじまらない一面があるから。									
【四】	幼少期の記憶									
【五】	①言葉	「いこう」 (衣桁)	①説明	まわりの大人たちはみんな「いこう」と言っていたので、どういう字を当てるのかも分からず、「いこう」と思い込んでいた。疑ってみたこともない言葉が、広くは通用しないのを知らされたこと。						
【五】	②言葉	「大晦日」	②説明	「大つごもり」が、「大つごり」と読んでいた。大晦日には年越しそばを食べるがそれも「つごりそば」と言っており、それが当たり前と思っていたが本来は「大つごもり」であつたこと。						
【六】	「客観的な意見」「客観的に描写する」など。									
【七】	ア									
【八】	方言には生まれる必然性があつて、土地と人間との結びつきを証しているから。									

4点

3点

4点

12点

3点

4点

4点

10点

3点

5点

3点

5点

5点

5点

10点